2018 年 8 月 31 日

各位

こども環境学会 2018 年大会（埼玉）

大会概要報告

■**大会テーマ**：こどもは未来
■**期日**：平成 30 年 5 月 18 日（金）～20 日（日）
■**会場**：ウェスタ川越（川越市新宿町 1-17-17）■
主催：公益社団法人　こども環境学会
■**共催**：埼玉県、川越市
■**後援**：埼玉県教育委員会、川越市教育委員会、内閣府、国土交通省、文部科学省、厚生労働省、環境省、日本学術会議、国立研究開発法人科学技術振興機構、公益財団法人 日本ユニセフ協会、公益社団法人日本ユネスコ協会連盟、一般社団法人日本建築学会、公益社団法人日本都市計画学会、公益社団法人日本造園学会、一般社団法人日本環境教育学会、一般社団法人日本発達心理学会、一般社団法人日本保育学会、一般社団法人 日本体育学会、日本子ども社会学会、人間・環境学会、日本安全教育学会、日本感性工学会、公益社団法人日本小児保健協会、公益社団法人日本建築家協会、一般社団法人都市計画コンサルタント協会、一般社団法人 日本公園施設業協会、一般社団法人日本公園緑地協会、一般財団法人公園財団、一般社団法人日本造園建設業協会、公益財団法人都市緑化機構、IPA 日本支部、特定非営利活動法人　チャイルドライン支援センター、公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン、学校法人東洋大学、聖徳大学（順不同）
■**参加費等**：
　大会参加費：
　正会員、団体会員：5,000 円
　学生会員：3,000 円
　会員外（埼玉県民以外）：6,000 円
　※当日参加は各々500 円増し
　埼玉県民、会員外学生：1,000 円（資料代）
　こども、障がいのある方：無料
■参加人数
　大会参加者数：533 名
名
会員 176 名、学生会員 33 名、会員外（埼玉県民以外）59 名、埼玉県民 142 名、会員外学生 18 名、こども 21 名、招待 28 名、取材 6 名、登壇者（会員除く）17 名、スタッフ 34 名（内学生 31 名）
懇親会参加者：106 名
エクスカーション参加者；44 名

■**内容**：
■**プログラム**
【5 月 18 日（金）】
エクスカーション
A コース
担当：中口毅博
小江戸蔵里→大正浪漫夢通り→昭和の街→一番街（蔵造り商家）→菓子屋横丁→弁天横丁→旭舎文庫→市立博物館前
B コース
担当：仙田考
さいたま市子ども家庭総合センター→認定こども園こどものもり→埼玉県自然学習センター・北本自然観察公園→認定こども園緑の詩保育園・森の詩幼稚園
【5 月 19 日（土）】
開会式・挨拶など
基調講演
「ひとりひとりの未来への力を育む教室
　～院内学級での実際のかかわり～」
主旨説明：吉永真理（昭和薬科大学教授）
講演者：副島賢和
（ホスピタルクラウン、昭和大学大学院准教授）
コメンテーター：
五十嵐隆（こども環境学会会長、国立成育医療研究センター理事長）、
仙田満（こども環境学会代表理事、東京工業大学名誉教授）
シンポジウム
「こどもの未来に向けたソーシャル・インクルージョン」
パネリスト①：東内京一（和光市教育委員会事務局教育部長）
パネリスト②：秋山怜史（一級建築士事務所秋山立花代表、一般社団法人ペアレンティングホーム理事）
パネリスト③：東恵子（一般社団法人ダブルケアサポート代表理事）
コーディネーター：三輪律江（横浜市立大学准教授、2018 年大会（埼玉）実行副委員長）
ポスターセッション
学会賞表彰・受賞者講演
懇親会

【5 月 20 日(日)】
ポスターセッション
分科会
分科会①　あそびは学び
～創発性育みの実践と学際的意義～
話題提供者
大豆生田啓友（玉川大学教授）
渡辺英則（ゆうゆうのもり幼保園・港北幼稚園理事長）
久保田健夫（聖徳大学教授）
山内秀雄（埼玉医科大学教授）
コメンテーター
張山昌論（東北大学大学院教授）
コーディネーター
小柴満美子（山口大学大学院准教授）
分科会②　地域でつなぐこどもの居場所
話題提供者
森田圭子(NPO 法人わこう子育てネットワーク代表理事･NPO 法人ホームスタートジャパン副代表理事)
関戸博樹(NPO 法人あさかプレーパークの会プレイリーダー､NPO 法人日本冒険遊び場づくり協会理事)
白土眞二(NPO 法人川越蔵の会副会長兼事業部長)
コーディネーター
中口毅博（芝浦工業大学教授）
分科会③　これからの保育環境を考える
話題提供者
若盛正城(認定こども園こどものもり理事長、園長)
羽田二郎（あんず幼稚園園長）
高山静子（東洋大学准教授）
コーディネーター
仙田考（鶴見大学短期大学部准教授、2018 年大会（埼玉）実行副委員長）
分科会④　アレルギーにならないこども環境
パネリスト
西本創（さいたま市民医療センター小児科科長）
園部まり子（NPO 法人アレルギーを考える母の会代表）
福島雅子（さいたま市子ども未来局幼児未来部保育課主幹、管理栄養士）
森茂亮一・谷田部良美（さいたま市民医療センター看護師、小児アレルギーエデュケーター)
コーディネーター
谷本都栄（帝京大学助教)、
ワークショップ
「こどももおとなも遊ぶアート体験！
未来をつくる　多世代交流ワークショップ」
こども向け『造形あそびワークショップ』
鮫島良一（彫刻家、鶴見大学短期大学部講師、同附属三松幼稚園園長）
おとな向け『およよ～ん！ワークショップ』
及部克人（武蔵野美術大学名誉教授、こども環境学会顧問・評議員）
映画上映会
海を渡る手話の少年～17 歳の夏～（英題：Teen Summer）：玉田雅己（学校法人明晴学園理事長）
総括セッション／閉会

【大会総括】
こども環境学会 2018 年埼玉大会では、「こどもは未来」をテーマとして、こどもに関わる諸問題について、多様な領域を横断しながら未来を見つめて議論を深める場をつくりだすことを目指しました。
大会に先駆けてエクスカーションとして、川越町並み散策（菓子屋横丁、弁天横丁、蔵造り商家ほか)、およびバスツアー（さいたま市子ども家庭総合センター、認定こども園こどものもり、埼玉県自然学習センター、北本自然観察公園､認定こども園緑の詩保育園･森の詩幼稚園）を実施しました。いずれも参加者のみなさんから好評を得ました。
大会の開会式では、埼玉県知事と川越市長よりご挨拶を賜りました。埼玉県と川越市から共催をいただけたことは、多くの県民、市民の参加につながり、広く一般に開かれた学会として望ましい大会となりました。
基調講演では､「ひとりひとりの未来への力を育む教室」と題して、あかはなそえじ先生として知られる副島賢和氏より病院内学級での実際の関わりを通してこどものニーズの捉え方を学び、参加者の多くは感情を揺さぶられて涙を流しながら、ユーモアあふれるお話にときに笑いがおきました。その後、副島氏を中心に五十嵐隆会長と仙田満代表理事による鼎談を行い、教育、医療、建築という複数の視点から議論を深めました。
シンポジウムでは､「こどもの未来に向けたソーシャル・インクルージョン」と題し、東内京一氏、秋山怜史氏、東 恵子氏より、妊産婦への継続的な支援について問題提起していただき、

社会的、経済的に支援が届きにくいこどもたちの未来を保証する取組みについて議論を深めました。

ポスターセッションでは、62 題の発表がなされ、厳正な審査にもとづき、そのうち 7 題を優秀ポスター賞として表彰しました。

分科会では、医療、福祉、保育、教育、建築、コミュニティなど多様な分野がともに議論する場を構築する 4 つのテーマを設定し、過度に専門的な知見に偏らず、学生や一般参加者と議論を共有できる場をつくりだしました。

さらに、広く開かれた大会の一環として、「未来をつくる多世代交流ワークショップ」や、映画上映会「海を渡る手話の少年 ～17 歳の夏～」を実施しました。併せて、埼玉県内の NPO 等の活動を示すパネルを展示しました。

多くの方々のご尽力のおかげで、学生約 80 人、一般約 200 人を含む 500 人を越える方々にご参加いただき、「こどもは未来」というテーマのもと熱心にご議論いただきましたことに実行委員長として心より感謝申し上げます。

【大会提言】

こども環境学会 2018 年大会（埼玉）提言

こども環境学会 2018 年埼玉大会は、「こどもは未来」をテーマに行われました。こども環境学会の会員に加えて、多くの県民・市民、学生にご参加いただき、熱心な議論が交わされました。こどもたちが、いま現在を精いっぱい生き抜き、未来へとその力をつなぐ。このような環境を支えるためにそれぞれの分野が考えるべきこと、実践すべきことを共有しました。基調講演、シンポジウム、分科会、ワークショップ、映画上映会で議論されたことを踏まえて、以下の４つの提言をまとめました。これらの提言も踏まえ、ひとりひとりの未来への力を育むこども環境が広がることを願っています。

大会実行委員長　仲綾子

1. こどもの「今」を大切にして、「未来」へとつなげよう

本当はやりたいと思っているのに、病気や貧困などによってあきらめてしまうことがないように、こどもの「今」を大切にしましょう。この姿勢こそが未来へとつながります。例えば、入院中のこどもに教育の機会を保障すること、貧困家庭のこどもたちが将来の夢をもてるようにすること、療養中の親子が治療と日常生活を両立できる態勢を整えることなど、わたしたちが取り組むべきことはたくさんあります。

2. こどものすべての感情を受け止めよう

こどもがこどもでいられる環境は、不快な感情を含め、どんな感情を表出しても大切にしてもらえ安心できる環境です。怒り、悲しみ、恐怖、不安、喜び、興奮など、こどものあらゆる感情を受容したうえで、伝え方やふるまい方をこどもとともに考えましょう。また、病気であることをネガティブにとらえず、自己肯定感を育むことが重要であり、できる/できないという判断基準でなく、こどもの存在そのものをいつくしみましょう。

3. こどもを支える大人も支え合おう

こどもに対する支援を行うためには、こどもを支える大人に対する支援も必要です。シングルマザー/ファーザー、ダブルケア当事者なども含む、地域で孤独に子育てをしている人々や適切な医療に巡り合えずに悩み孤立している人々への支援や連携が求められます。そのためには、人を育てるとともに仕組みを育てるという視点も有効です。今後は、行政、企業、NPO・NGO、市民、専門家、ボランティアなど立場や年齢などを超えた多様な連携がますます求められます。

4. あそぶことは学ぶこと、学ぶことは生きること

あそびには、選択、決断、判断、思考、創造、創意工夫や身体運動などあらゆることがつまっています。よくあそぶことが、将来、課題を見出して解決を志し、行動する心身を育てるために重要な学びとなります。そして、学ぶことは、こどもたちが多様な自己イメージを容認しリジリエンスを高めて、いま現在を大切にしながら、未来を生きる力を育みます。「こどもは未来」を謳うとき、あそびは基礎となります。改めて、あそびを大切にしていきましょう。